

～持続可能な地域社会の仕組みづくり～

中山間地域コミュニティ再生重点プロジェクト事業

事業成果中間報告会

日 時 平成22年3月24日（水）

10:00～16:30

場 所 あすてらす1F「ホール」

○司会 それでは、突然のハプニングということで、これも生のよさということで、驚き半分ですね、楽しみながらいきたいと思います。

それでは、これまでの各地区からの御報告を伺いまして、いろんな要素が既に出てきているのかなと思います。例えばコミュニティー活動と民間活動が連携してるとか、それから組織づくり、地域のプロジェクト組織と、それから人材の配置、収益のつくり方、それから計画づくり、あと遊休施設の使い方ですとか、特に目立ったのは小規模高齢化集落、限界集落という言葉も出てきましたが、そういうところへの危機感と対応ということがあったかと思います。

それで、このトークセッションではそういうことも踏まえまして、全体的なテーマとしては、まず分野縦割りではなくて横断、連携、総合というような、そういう視点から語ってみたいと思います。もう既に各縦割りでやってるような限界を超えまして、これは皆さんの総合力の発揮だということを非常に力強く感じたところです。そういう観点で順番に話を聞いていきたいと思っております。

それではまず、きょうトークセッションに御参加の皆様の自己紹介も兼ねて、これまで御自身がどういうふうな形で活動にかかわっていらっしゃったかということ、若干紹介していただきたいと思っております。

それでは早速ですけども、石橋さんの方から順番に言っていただければと思います。よろしくをお願いします。

○石橋氏 失礼します。邑智郡邑南町市木、安夢未プロジェクトの地域マネージャー、石橋です。安夢未といいますのは安心、夢、未来の頭文字をとりまして安夢未とつけました。大変いい名前だと思いますけどいかがでしょうか。（拍手）これ公募制で私、調子に乗ってそれを出しましたら見事に採用されて、おまけにマネージャーがついてきたというわけです。これはでも市木の人はだれも知らない、皆さんに初めて発表したことです。その安

夢未、今、安夢未、安夢未と言っておりますけれども、安夢未のマネージャーとして1年と半年少々です。

私がどのようにかかわってきたかという、今、司会の方からあったんですけれども、はっきり言って成り行き任せというのが正直なところですよ。あしたのことをきょうどうしようかというような状態でやっているのが実際のところかなと言ってもいいと思います。市木という、この安夢未というのは市木に一自治会があり、一公民館があり、そしてこの安夢未があるということで、時々トップが2人いたりとか、あるいは公民館の中におりますので、公民館のこと一緒に協力してやったりとか、結構まざって仕事してるということも多いのではないかと思いますし、公民館主事、先ほどレシピ発表してくれました北野主事のおかげで、私がマネージャーとして働いておられるというところもあるわけです。ですから、このマネージャーの仕事というのを1人で私がやってきたかという、決してそうではないかと。やっぱり市木の皆さんの今何を求めているのか、何が必要かというのを酌みながら何とか進めているというのが、正直なところかなというふうに思います。

紹介のところに書面でですけど書いてありますけども、農家民泊というのをやっておりますし、こちらの方なかなか大変です。ですが、私自身ができることといえば、やっぱり皆さんの力をどうおかりしていくかということを考え、それで何とか回っていく安夢未をつくるというのが私の仕事ではないかなと思っています。1つだけ私の直接事業としてやっておりますのは絵手紙サロンで、これももう勝手なことで私が絵手紙をしたいから絵手紙サロンを開いたというだけのことなんですけど、これも今で19回を数えて月1回細々と続けているのかなということです。あとはやっぱり安夢未の皆さん、スタッフ、委員の皆さんの代表として私はやってるんじゃないかなという感じです。以上です。

○司会 ありがとうございます。

じゃあ、続いて塚本さん、お願いいたします。

○塚本氏 皆さん、こんにちは。私は縁の里づくり委員会という組織の地域マネージャーをしております塚本と申します。私の地域は先ほども説明がありましたけれども、非常に高齢化率の高い、やはり地域でございます。資料もありましたが、870人ばかりの人口と330戸の世帯、こういった地域なんですけれども、しかしこの地域のちょうど真ん中には大きな山がございまして、ですから波佐・小国地域というような紹介をきょうさせていただいておりますけれども、波佐地区と小国地区という2つの自治区、公民館も2つございます。

そういったところが同じ環境の中で日々生活しておりますので、何とかひとつ、この2つの自治区が手をとり合いながらひとつ元気になろうやという、そういう意味で縁（えにし）という名前をつけて縁の里づくりというふうにしたんです。よそ様の方々のほとんど、縁の里づくりというふうには読んでくれませんで、本当、縁（えん）という字が縁に見えるようでございます。

そういった中で1年、2年、ちょっと事業を非常に県の方々の御指導、市の方々の御指導をいただきながら手探り状態でやってきているわけですが、やはり私たちが今一番思っておりますのは、そんなに背伸びをしなくても非常に地元にはすばらしい宝物がたくさんあるんだなということに日々気づかせてもらうわけです。実際に地元で暮らしておりますと、ほとんどそれに気がつかない。しかしながら、都市交流等を少しばかりスタートさせてみますと、本当にとんでもない、何でもないようなことに非常にびっくりされたり感嘆されるわけです。こんなことが何でそんなにいいんだろうというような不思議な状況なんですけれども、その事業をするたびに、これは何とか使えるんじゃないかなんかというような気持ちになりまして、自然の恵みというものが武器に変わってくる、これを使わない手はないなというのを日々感じております。

私は生まれも育ちも地元の出身でございます。地域マネージャーはというお話が入ったときには、外部からのマネージャー選択、これも新しい風が吹いていいかなという検討を随分させていただきましてけれども、私のところでは2人のマネージャーを置いております。なかなか地域の皆さんとともに新しいことをいろいろ考えて進もうというときにはマネージャーとしても相談相手が必要になりますし、いろいろと1人よりも2人の方がいい知恵が出るだろうというようなことから、地元の出身でマネージャーを2人つけて頑張ってみようということでやらせていただいております。

先ほどもちょっとお話が、報告がございましたけれども、やはり地域を動かそうとすれば、なかなか他の地域から入ってきまして、その地元をまず知るだけでも時間がかかっちゃいます。生まれてからずっといましてそのことが短縮できます。

それからもう一つは事業が終了いたしますと、どうしてもマネージャーの手当とかいうようなものも継続できるかできないかわからない状況になってきますと、よその地域へ異動するということになる、せっかく地域を知り得た非常に大切なお方が転勤なさるといふのじゃ寂しいなというようなことから、やっぱり地元の出身者が死ぬまでおってもらうの方がまあいいかなというようなことで、地元の選出になったのではなからうかという

ふうに思っております。

そういったことで私はマネージャーやらせてもらっておりますが、実は私はまだJAの職員でございまして、両立どうしようかなという一つの悩みもあったんですけども、実は非常にうちの組合長がここで持ち上げとかにやいけんのですが、非常に彼もいい方でございまして、個人的な理由じゃなくって地元の活性化につながる活動のためなら特別休暇をやるよというようなことから、きょうも特別休暇をもらって出席させてもらっております。身内の不幸があるか結婚するかぐらいしか特別休暇は与えてもらわれんと思っておりますけれども、それぐらい重要な地域の仕事というふうに認識していただいております。ちょっと組合長さんを持ち上げておきました。そのようなことできょうは大変よろしく願いをいたします。以上です。

○司会 ありがとうございます。

それでは、続きまして種地区の渡邊さん、お願いいたします。

○渡邊氏 失礼します。種地区振興センター並びに種公民館の渡邊修といいます。実は私、48歳、今から12年前、平成10年に公民館長になりました。普通、益田市の公民館長さんは学校の校長先生上がりとか市役所の退職された方、農協の出身者とかそういう方がなられてます。私のように若くて民間から公民館長になったというのはすごく珍しかったです。行ったらみんな大丈夫かというような感じで不思議そうな顔をして見ておられました。

ただ、私は今ここへ来てますけど、ニットの製造の方の仕事をしてました。種地区には御婦人が農業だけでは無理だと、家庭内職をやろうということで、共栄農協がセーターの編み立て工場をつくったんですね。そこへ私たまたま名古屋から帰ってきたときに仕事があると、来てくれないかということで30何年ニットの仕事を続けてました。ですから、社会教育なんて全くわからない男が公民館長になったわけです。私は地域の人が何で私を公民館長にしたのかなと考えたときに、若くて言いたい放題のことを言うやつがおると、こいつに地域少し変えてもらえるんじゃないかないうような期待の中で館長にされたんじゃないかと考えます。

私が一番最初に手がけたのは、公民館長になって2カ月もしないうちに種の小学校統合しますと。種地区の住民に統合の説明会をしたいから種地区民を集めてくださいというのが私の第一の仕事でした。私は小学校の統合は反対の旗頭みたいな男でしたから、いいですよ、地区の人を集めるのはいいですよ、ただ話を聞くのはいつでも聞いてもいいと。で

も私はやっぱり反対だったんですね。教育委員会が辞令出して指名してくれた館長が種の反対の旗頭なんていうて、多分教育委員会もわかってなかったんだと思いますけど、そうして反対はしたんですけど、反対する中でただ反対して統合なんかをとめることはまずできないと。

ここで私、青年団活動してたんですね、青年団活動してみんなと一緒に楽しく芝居やって、切られ役やってかつら飛ばして笑われたり、いっぱいやってました。そういう仲間がいましたから、小学校の統合を反対しようと、ただ反対するだけじゃだめだと。

じゃあ何するかいったときに、公民館の前に荒れた小さい畑の山があったんですね。そこを僕らの力で開拓して住宅つくってやろうじゃないかと、住宅団地ですね。そこへ安い単価設定して、ここへ子供を連れた若い人を10世帯ほど入れたら、子供が一気にぼん、ふえると。この間は統合を避けられるよということで造成しました。自分たちで手弁当で水路つくったり測量して側溝入れたり、そういうことをやりながらできるだけ安い単価、若い人が子供を連れてきても入れるような単価、要するに100坪を200万で販売できる価格設定をして造成しました。最終的にはこれが土地の中へいっぱいいっぱい赤道が入ってたり合筆したり分筆したりするのにお金かかっちゃって、250万まで値上げせんと大赤字になるということで少し単価上がったんですけど、そういう活動してきました。こういう活動をしてる中で地域が必要としてることを公民館はやるべきだと考えたんですね。ですから、私は公民館の仕事何なんかなと思いつつながら、地域の活性化のための仕事はしませんでした。

ですから、第1次中山間直接払いが入ったときに事務局を公民館がやりました。事務局がないために直払いに入れなかった集落がたくさんありました。これを公民館が事務局やっただけのために、種には何百万いうお金が入ってくるわけです。公民館はこういう経済効果を生むような仕事はできないんです。ですから、そういうことも手がけました。ただ、1点ほどいいことは、教育委員会がこういうことをやってる私を呼び出して指導することはありませんでした。

ですから、今そういう活動がずっと続いてきて種のまなびや工房につながって、現在の少し前向きになった種地区があるんじゃないかと考えてます。また後からお話しできると思いますので、よろしくをお願いします。

○司会 ありがとうございます。

それでは続きまして、雲南市の木村さん、お願いいたします。

○木村氏 雲南市地域振興課の木村と申します。よろしく申し上げます。行政関係のコメントということで出席しておりますけども、雲南市は4万4,000人の地域ですけども、6町が合併をしまして、16年の11月ですか、地域づくりということで今、地域振興課の方でいろいろ仕事しているところですけども、ちょうど私も非常に山の中に住んでまして、40キロ弱を毎日通っているような状況です。自宅からいえばこちらの方が近いかなという感じがしますけども、特に6町が合併しましたからいろんなことで周辺部の取り組みについて心配されているところですけども、これを何とか地域振興課の中で対応するようというようにあります。

後でお話ししますけども、交流センターということが大きな職務として任せられているわけですけども、ことしの4月からスタートということでございます。よろしくお願ひしたいと思います。

○司会 それでは、5番目、白石さん、お願いいたします。

○白石氏 こんにちは。松江の藤井基礎設計というところの白石と申します。私は実はこの大田市が出身で、実家は歩いて10分とかそれぐらいのところであります。今回は民間の企業という立場から、当中山間地域にかかわっているということでの話をさせていただければと思ってるんですが、私自身は中山間地域のかかわりは3年ほど前にさかのぼって、浜田市の弥栄自治区での社会実験といいますか、いわゆる限界集落とか危機的集落というところの維持、存続についてどういう形があり得るのかな、どうやったら地域として、集落として今後、維持できていくのかというようなことを、実際には半年ほどだけですけども、弥栄に住みながら従事させていただいたというところから、中山間地域というところを強く意識するようになりました。

ただその前に、今、来月の4月で30になるんですが、入社して丸6年たとうとしてるところなんですけれども、それまでずっと入社以来、隠岐の島町、旧西郷町を中心に今の隠岐の島町に大変お世話になってるというか、仕事をさせていただいておまして、入社当初からずっと僕の仕事相手というのは地域住民の方というか、地域の方がこういうことをやりたいんだけど手伝ってくれんかとか、こういうことを、何となくこういう地域にしたいんだけど、何かいい情報はないかというようなことをいろいろやりとりさせていただきながら、何といたしますか、地域の熱い方っていうのはどこにでもおられると思うんですが、そういった熱い方と話をしながら一緒に計画をつくって事業を進めていくためのサポートをするということをして5年、6年とやってきて、その延長上というか、その積み重ねの

中で弥栄に出会い、また隠岐の島町にまた戻って、今、中山間地域の事業としてお手伝いさせていただいてるところかなというふうに思っております。

特に事業の中で非常に苦勞するのは、やはり地域の熱い人と一般の住民の方ですね、この間の温度差っていうのをどうやれば埋めていけるのか、どうやれば近づけていけるのかというところを常に意識はしてるんですが、なかなか正解というか、こうすればうまくいくというのがなかなか見えてこない、これも試行錯誤しながらやっていくしかないのかなというふうに思っております。とりあえず以上です。

○司会 どうもありがとうございます。

白石さん、弥栄の方でも活動いただいたときは、どちらかという地域マネージャー的はことを地でやっていただいている。今、隠岐の方では地域マネージャーさんを支えるような動きをされていらっしゃるということで、まずちょっと白石さんの方から聞いてみたいなと思いますけども、よろしいでしょうか。

○白石氏 はい。

○司会 そういう立場の違いを経験して、やはり地域の人材ということでどういうふうなものを重視した方がいいのか、またどういう役割がいいのかなということで、これ先ほど塚本さんの方から地元の方っていうようなお話もあったんですが、逆に今度、外からの立ち場として見たときにその御感想をいただければなと思います。

○白石氏 外から入るということの意味というのは、やっぱり地元の方を採用するのとはまた別の意味がやっぱりあるとは思いますが。それは弥栄のときもそうですし、今の隠岐でも実際そうなんですけれども、そこの地縁というか、地域とのしがらみみたいなものが特になんないというのが、一番やっぱり大きいのかなというふうには思っています。

あと、それとよく言われる外部から来た人が地域資源について、何というか、そこに住んでる人は一般的になれ過ぎてて気づかないけど、外から来る人は気づくというふうなことはよく言われますけれども、これはどちらかという個人的にはセンスというか、とらえる感覚によるものかなとは思いますが、外から来る人でも気づかない者は気づかないし、地域にいる人でも気づく人は気づくということかなとは思っています。

ただ、しがらみがないという点では非常に外から入るといえるのは意味があって、弥栄でも隠岐でもそうなんですけれども、長くかかわれば当然しがらみらしき人間関係って出てくるんですが、それはもうどちらかという割り切るといえるのか、気づいてるけど知らないふりをしてどんどん平気でむちゃなお願いとか外部の人間を装ってこう、実際には半分つ

ながってるようなもんなんですけども、よそ者みたいな感じで軽くお願いしたいとかっていうこともできる立場かなと。

ただ、それで地元の間人間関係壊しちゃいけないというのがあるので、そこの辺、バランスはすごく難しいかなとは思うんですけども、午前中、どこかのプレゼンテーションの中であったんですけども、地域マネージャーに求められる役割として来年度以降研修会をやって人間力とか対人対応関係の能力を築いていくというようなことを上げておられた地域があったと思うんですけど、やっぱり上がっていった能力、求められる能力というのはまさにそうなのかなというふうに思いながら見てました。

やっぱり一番大きいのは弥栄では僕1人で入っていったのではなくって、中山間センターの職員研究員の方がもう1人コンビで入っておられて、その方と非常に年齢も近かったというのもあるのかもしれませんが、非常にいい人間関係の中で一緒に相互に信頼できながらやっていたのかなというふうに思ってます。

今回の事業の中で、地域マネージャーさんが1つの地域に1人しかいないというところ、非常に大変なんじゃないかなと思っまして、結論からいうと、2人以上やっぱり地域マネージャーというか、2人体制ぐらいではいくべきではないかなというふうに思ってます。

というのはやっぱり1人になると考えがどんどんどん煮詰まってきて自分が一体何をすればいいのか、これからだれに相談すればいいのかっていうのが本当にわからなくなるのかなと。その中で2人いればお互いに相談できる、悩み共有できるということもありますし、雑談で何かひらめくというのもありますので、そういう意味では2人体制がいいかなと。その中ではその2人いりゃいいというわけではなくて、やっぱりお互い信頼できる関係、人間性みたいなところもやっぱり求められていくのかなというのはありまして、信頼されないことには話ができないと。話も聞いてもらえない、話も聞きたくないというような形になってしまっはこれは元も子もないので、やっぱり対人のコミュニケーション能力というのがこの地域マネージャーという役割には一番強く求められるのかなというふうに思ってます。

○司会 先ほどの対人能力アップというような研修が出たのは雲南市さんでしたかね、地域マネージャーの活動とスキルというお話でありましたけども、何かそういうところで研修、今されていらっしゃるってございますか。

○木村氏 マネージャー制度を持っているわけですけど、ちょうどマネージャーという立場の名前で活動していらっしゃる方が20名ぐらいいますか、ただちょうどマネージャー

という名前じゃなくても結局、今のパートナーとしてそういったマネージャーの役割を果たしている組織の役員であるということは随分たくさんいらっしゃるようですので、その辺のところ特にマネージャーでなくてはいけないということでもないかもしれませんけども、ただ組織によってはマネージャーとしてだよということの位置づけをして、しっかり役割を明確にするということはいいと思います。いろいろ役員にしてもマネージャーの選任にしても、いろいろ能力を上げるということ、スキルアップをする必要があるわけですので、雲南市としてはそういった研修の場というのはそれぞれ持ちまして、地域づくりに係ることも総合的にそういったお知らせをしてその場に出かけていただくということとはとっているところです。

それで、特に繰り返しになりますが、マネージャーという人ということは必要でしょうけども、今現在では組織の中ではそういった人が複数いる中でのマネージャーの役割を果たしている。その役割もスキルアップをする必要もありますので、研修というのは随時やっていると現状にあります。

○司会 これ、ひとつ行政ができる役割の大きなものかもしれないですね。

それから、白石さんのお話の中で弥栄の方でもう1人と一緒にということで、これ御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、皆田さんという方が今まで3年間やってきてもらったんですが、冗談まじりに話すのが脚本、監督、主演、皆田潔という、そういう1人何役も抱えてしまうという、そういう状況にどうしてもなっていくんじゃないかなという話をよくするんですね。この話で2人体制が必要だよということもあったんですが、ちょっと石橋さんに聞いてみたいんですけども、そういうマネージャーさん1人に集中してしまうような状況ってあったんじゃないかなと思いますが、そういうとき、どういうふうに課題を抱えられてどうされたかというのを、もしありましたらお聞かせいただければと思います。

○石橋氏 1つ参考になるかなということをお話をちょっと話したいんですけど、かるたをつくりました。そちらへ出しているんですけども、データ部という部会の中で、市木の文化であるとか歴史もやっぱりデータとして残しておかないといけない、そのためにはかるたをつくりたいと言いだしたのは私ではありません。委員の中のお一人です。その方も絵手紙サロンというのがあれば、絵をかく人がいるんだからもう絵は大丈夫。それならそういうかるたを考える人を集めればいいんじゃないかということで、その委員のお一人がやりたいということをおっしゃいました、かるたをつくりたいと。私はそれを援助すると。か

るたをつくりたいと思うので、皆さん、御協力くださいと言って毎月出している「こんにちは」という広報で募集しました。あ、いいよと言って来てくださった方もあるし、なかなか募集だけでは来てくださいませんので、お願いをした方もあります。かるたは3月19日に第2回の委員会をして、きのう印刷会社の方からすべて持ってきてもらったんですけど、ちょうど1年間で27回くらいの委員会をその間にいたしました。これはなぜできたかという、昼間の会合が可能であったからということです。ということは、それに参加した人はすべて仕事を持っていない高齢者の方であったというわけです。

その中で私が思いましたのは、リーダーがいたということです。集まってくくださった中のお一人が非常にリーダー性のある女性の方で、役場を終えられた方だったんですけども、その方がリードしてくださったの。毎回出席、ほとんどもう、かるた委員会委員長というくらいのことをしてくださいました。そして安夢未の委員の方が、これはいろいろと人をお願いをして歩いてくださいました。私は公民館の中で事務局的なことをしました。そうすると、1つの仕事をするに当たって、やっぱり3人という人がいると1つの仕事ができるのじゃないかなということを思いました。

ちょっとごめんなさい、宣伝しようと思ったので、今回かるたというのをつくったときに合計協力者は20人くらいです。こうやってまだ入れてないですけど、このくらいの方が協力をして、上の方は委員会のメンバーです。下は絵をかいてくださった人です。この絵をかいてくださった人は、もう八十五、六の方というのもおられまして、1人1枚、それからあるいは多い方で、もうできなくなったらこの人のところへ行けば大丈夫だという方がお一人、お二人おられまして、もうギブアップした人がいたらお願いをしに行きました。

例えば私が持っているこの絵は80何歳かな、絵手紙のおばちゃんです。

[テープ中断]

○石橋氏 これは仰ぎ見る田中頼璋眠る丘という札なんですけれども、田中頼璋さんに10歳のころ出会ったことがあると、話を聞いたことがあるから、その顔を何とか思い出してかくとかいってかいてくださったんです。そういう感じで1枚一生懸命かいてくださったという、そういう動きがうまくできたらというのがかるたの方の、1年間で何とかできたということの要因になると思います。

だから今、何とかやりたいという人が3人おればいいなと。だから来年度に向かって、これをしてほしいという人を2人頭に置き、そしてそれにマネージャーが少し援助する、そう

することで何かこう回っていくことがあるんじゃないかなというふうに今、思っているところで、また宣伝ですけども、竹炭燃えてるんですけど竹炭、これもやりたいという人が委員の中において、それからまた自分もやりたいというのでできたんですけども、だけど、この竹炭をする間に中山間の若い若者たちとか、あるいはスタッフの子供たち、あるいは我が家にやってきたお客さん、あるいはハイランドに来ているシェフとか、そんな人たちがいろいろなつながりでやってくるんですね。だから、私はつながりをつくっていくということが一つ仕事かなと。

そうやって私がみずから働くよりは、そのつながりを次々とつながっていく人たちをいろいろとゲットしていくっていうことで、それを私がやっていくと、そういうプレイングの方が回避できるのかなというわけで、このかるたというのがとてもいいことしの動きに委員会としてはなったかなと。これをモデルにして次のステップというのに入っていけるのではないかなということを感じました。だからちょっと回避する方法というところまではいかないかもしれませんが、とてもよかったなと、動きがよかったなというふうに思いました。

○司会 ありがとうございます。

確かに回避じゃなくて本当にマネージャーさんの仕事になぞらえて、一番いい地域の裏方さんといいますか、支え役というか、つながりづくりというところが非常に大きな制度なのかなと思います。

どうぞどうぞ。

○石橋氏 済みません。実は小学校もかるたをつくったんです。これ、連携ということでぜひ皆さんにお知らせしようと思って、済みません、長くなりますが、2つかるたができて、こちらの方は既にかるた会が終わりました。私たち委員会の方は歴史、文化という観点で、でも子供たちは市木をどんな目で見てるんだろうかということをお願いをしたら、とても快く一緒にやりましょうということで、3月10日にもうかるた会をされたんですけど、とても子供らしい柔軟な発想でいろいろな言葉を残してくれました。「ルール守り事故のない安全な市木」とか、「市木の人は優しい声であいさつするよ」とか、「山があるきれいな葉っぱ楽しそう」とか、いろいろなやっぱり子供の声というのもとても大事なので、それがこういう形で出てきたのじゃないかなというふうに思います。

いいです。たくさんありますが、私はまた後で。

○司会 それは販売されてるんですか、かるたは。

○石橋氏 はい、1,000円で売ります。もしよければ買ってください。余りたくさんありませんので、お早目に。

○司会 じゃあ、早い者勝ちということで皆さん、よろしければお買い求めください。

石橋さん、冒頭の話にも主事さんとのタッグで地域づくりが進んだということがありましたが、そういう公民館との連携も考えていくことが必要かなと思います。

渡邊さん、ちょっとお伺いしておきたいんですけども、渡邊さん、館長兼センター長さん、それから主事さんと囑託さんという、これはまた3人というようないいパートナー同士が動いてるという形になろうかと思いますが、そういう中から従来の地域づくりと公民館活動、余りこういうのを意識されずにきたのかなと思いますけども、その辺はいかがでしょうか。

○渡邊氏 最初は社会教育、それを何なのかわからないまま公民館入りました。でも社会教育の基本のところ町づくり、これはあるわけですね。じゃあ、僕がやってきたことは1個は町づくりかなと。町をつくっていくためには、さっきもいろいろ限界集落とか危機的集落とか出てきてるんですけど、私はそういう集落を一個でもなくしていかないと町に元気が出てこないと。

うちの場合は私が公民館へ入ったときに4自治会の14集落あったわけです。これはあんまりにもバランスが悪いと。2世帯でも1つの集落をつくってること自体が地区住民にも負担を与えてますし、活動的にも無理だというようなことから自治会と協議した結果、自治会の再編成、集落の統廃合をやったわけです。

今、自治会の数は4つで変わってないんですけど、14集落を11集落まで減らしました。統合させたわけです。自治会の数は動かしてないんですけど、戸数を9、世帯数が9世帯で1つの自治会を組織していた自治会があります。これをそのまま放置しておくと、この中で西部自治会長さんにとって、組長さんにとって、こうやっていくと高齢世帯の方だって組長やったり自治会長やらないと、これ集落がもたない、自治会がもたないよという現象が起きてるわけです。ですから、この集落を種の中で一番大きかった下種自治会というのがあったんですけど、ここを統合させたんですね。今9戸あった後谷いう自治会を下種自治会に統合させて、これでは3つになってバランスが悪いわけですね、4つあった自治会を3つにしちゃったと。やっぱり自治会は4つある方がいいのかなというような考え方で統合した自治会をまた真っ二つに割って、自治会をバランスよく4自治会に再編成したと。こういうこともやっぱり僕は不自然と思ってやったことなんですけど、町をつくる

ためには、バランスをとるためには必要だと。

私は農地・水・環境保全、これも種地区全域で取り組んでいます。この事務局もやっています。これやってる間に10年後の種のビジョンを出しなさいという部分が出てきました。これやってみると10年後には100世帯割るわけですね。人口だってもう300は切るじゃろうと、当然、切ると思います。そうするともう今から10年先を見据えてもう一回、自治会、組の統廃合をやらざるを得ないと。今、私が考えてるのは、一部の自治会長さんと話してるのは、もう種は仕方がないと。3自治会にして集落数も減していこうと、こういうこともやっています。

公民館が果たす役割の中に町づくりがある、おまけには合併したときに種の公民館のもう一個上に地域振興センター、自分たちで考えて自分たちの町をつくってくださいと、こういう組織ができたわけです。

ですから、もう何やってもうちの場合はいいですよ。（笑声）とにかく活気があって地区民が目標を持って生き生きできるような事業を展開するといいいと。当然さっきまなびや工房の話が出ました。荒廃農地がもう40%いきますよ。これも一生懸命、農地・水・環境保全のお金使いながら復元して、そこへ作物つくって、これを加工場へ持っていくと。加工場へ持って行って加工して製品にして発送するという、こういうこともセンター一緒になって考えてます。

うちが一番活動がジャンプアップできたもの、これはさっきうちの岩藤君が、うちの取り組みを発表してくれました。彼3年前に九州からUターンして帰ってきた人なんですよ。これも私たちがつくったあすをゆめみる会、要するに、種の中学を卒業した人に対して地元の情報を流し続けた。もう一個はアンケートを入れて皆さんは団塊世代ですから種に帰ってきたいですかとか、そういう部分。種がもしあわよくば特産品つくったら、都会に送っても買っていただけますかというようなアンケートをつくったりして発送してたんですね。これを読んで岩藤君は、こんなことを種やってるんかと。じゃあ私も帰って手伝いがしたい、そういうことで帰ってきてくれて、今につながってる。

公民館、うちはさっきお話があったように益田市は職員が1人配置されてるんですね。うちは僕がこんな男ですから、職員を市役所へ返しました。返した結果が岩藤君が嘱託職員で公民館へ来てるんですよ。ですから、地元は本当に必要としてる人材をうまく利用する。

もう一点は復元した土地に豆茶を栽培してます。これは1つの自治会の中の高齢化が進

んでるところへ持って行って作付してもらいました。これだって僕の考え方からいうと、農家、種のように農業中心にした生活圏を持つてるとこは公民館はどんどん栽培の講習会とか加工の講習会、こんなことはやるべきだと思うんですよ。隣、農協の人がおられますのでこっち向いて話しますけど、最近農協は営農指導してくれてないんですね、もうJAバンクですから。貯金と保険は物すごい一生懸命ですけど、農家に対しては非常に冷たいです。ここら辺はやっぱり公民館がカバーしてあげる必要があると。これだって立派な生涯学習。農家にとってどうして作付する、どうしたら無農薬で栽培できる、どうしたら生産効率が上がるか、こんなことだってうちは加工場つくったおかげで公民館でそっちの勉強はやってます。ですから、別に、これは振興センター、これは公民館、これは出張所へ、そんなことを考えてたら地区の公民館は動きとれないんですね。全部一緒です。犬猫が道路に死んでも公民館。土木関係で苦情が来ても公民館、全部公民館が対応してるんですよ。

ただ、一個言えることは、公民館だけじゃないんですね。各組織と自治会がきちり機能してますから、自治会と公民館は車の両輪になってますので、うちの考え方は自治会にも伝わってます。自治会の考え方はこっちに伝わってます。ということはすべてうちが事務局をやってますから。そういうことで縦割りとか横割り、今からそうことを考えてたら仕事はできないです。

○司会　すごくわかりやすい話なんですけど、同じように雲南市の交流センターで目指すところは種地区のようなものなんかどうかも含めて、ちょっと今後この4月からスタートということなんですけど、ちょっと御紹介いただければと思います。

○木村氏　隣に渡邊さんがおられると僕はしゃべらんでもいいなと思ってましたが、今お話しのように、雲南市ことしの4月から交流センターをスタートすることになりました。

ちょうど2年前から説明にかかわったわけですけども、まず、市の基本計画の中に市民と協働の、市民と行政の協働のまちづくりということ掲げて進んできたわけです。地域づくりについては主に3つですか、地域自主組織、それをつくる。地域自主組織というのは自治会を超えた複数の自治会とそれからいろいろ団体を加えた横断的な考え方で生きる組織というんですか、小学校区単位つくるということで、まず自主組織をつくる。これが全部19年の秋につくりました。

それから地域振興補助金ということで、図書を7,000万ぐらいでスタートしていくと思いますけども、5,500万ぐらいの枠で進んでいくと思いますけども、このお金の

交付をするという制度。

それから今度、交流センターという施設、これについては公民館がそれぞれ今あるわけですが、この公民館という名前を交流センターに変えるわけでございます。ただ、公民館長さんは教育委員会の任命でしたけども、今度そういうことではなくて、地域の方が任命をするということの変更をするわけです。ですから公設、いわゆる施設は公民館施設を使うけども、運営はすべて地元ということであります。ただ、お金は措置をしていく必要がありますので、お金と施設の提供、そして情報提供等、あるいは指導的なことは市がやるわけです。

ただ、ちょうど20年の春から説明のスタートをしたわけですが、当時は公民館関係者からは非常にきつい反対というか、意思表示がされておりました。説明会に行きますと、やじが飛ぶとか怒号が飛ぶとかというような非常に悲惨な状況だったなということをおもひ起こしています。ですが、粘り強く説明をした結果としては昨年の二、三月ですか、議会の方でいわゆる交流センター条例を可決ということで進んできておるわけですし、交流センターではいわゆるこれまで行われてきた生涯学習、これが1つ。それから市民活動、いわゆる地域組織が中心になって行う市民活動、これが2つ目。それから地域福祉活動、社協さんの指導のもとに地区福祉委員会というものができておりましたから、その福祉活動、この3つを総合的にやっていくというスタイルをとろうということでスタートしようとしています。

これからスタートするものですから、なかなか自由にいかどうかというのはまたいろいろ課題もあると思いますけども、これがどうなるかこれから詰めていくことになります。この4月1日に発足式をやって、一斉にスタートすることになりますが、市内29の施設ということになりまして、おおむね旧小学校単位、小学校校区の単位ということになります。お金についても2億円ぐらいのお金、2億円以上と思いますけども、お金を措置してやっていくということになりまして、センター主事とかセンター長は置いて、地域づくり活動なり生涯学習活動、福祉活動なりの支援をする体制をとるということになっています。

いろいろ今回、重点プロジェクトについても推進をしていますが、肝心なのはこれから継続することでありまして、同じ取り組みとしてはこの地域自主組織という組織が事業の継続をできるかということにかかっているということをございまして、お金の措置していく必要がありますけども、お金を余り量が大きくなりますと、どうしても行政依存型が高くなるということが非常に難しいところですけども、いずれにしても行政も支援をするけ

ど、地元の予算も頑張ってくださいと、こういうスタイルをとろうとしているということ
でございます。よろしくお願いします。

○司会 ありがとうございます。

渡邊さんのお話から地域のことは公民館がやっていく、何をやってもうちの場合はオー
ケーというようなそういうこともありましたけども、それは自治会がきちんと機能してい
るからということと、それから交流センターはやはり地域自主組織というものが核になっ
ていくのかなと思います。

どうぞ、そういうところで生涯学習課長の矢野さんの方から県の考え方ですとか施策に
ついて御説明いただければと思います。

○大矢氏 島根県教育委員会生涯学習課長の矢野でございます。こうしたコミュニティー
再生という地域振興のこの現場に、何かちょっと異質なようなそういう存在ではないかと
思っておりますが、こうした会に呼んでいただいて大変喜んでおります。

公民館とこうしたコミュニティーの連携というお話でございましたが、従来、県内に公
民館というのは約300ございます。しかしながらその300の公民館、戦後の復興を支
えた社会教育法に基づくそういう地域の拠点でございましたけれども、最近、先ほどの益
田の公民館、これが今、平成16年から地域振興センターともう1枚の看板をつけて今2
枚看板で存在しております。それから雲南市も、この4月からこれは公民館条例は廃止に
なったので、純粹には公民館とは言えなくなるわけですけれども、交流センターという、
そういう形に変わってまいります。それ以外にも例えば安来市でも交流センターという名
前になって、ただやはり公民館としての役割も条例として残して2枚看板でございますし、
出雲市はこれはすべてがコミュニティセンターという、全くこれも公民館と離れた別組織
になってます。そしてまた、この当地の大田市の状況も昨年の4月から従来の公民館はま
ちづくりセンターという、そういうセンターに首長部局にかわり、それからその上に1つ
屋根をかけてブロックの公民館ということで7つの公民館を残してるというふうに、県内
の公民館の状況が最近、非常に変化を遂げております。そういうわけですから300の公
民館、従来の公民館は今、半分ぐらいはそうしたさまざまな変化の中で新たな課題に向か
ってるという、そういう状況であるかと思えます。

ただ、公民館というのが、じゃあそうした地域の振興とは本来関係のないものかとい
うと、実はそうではないと思っております。先ほどの種公民館の渡邊館長さんの大変力強いお言
葉がございまして、皆様も例えば公民館であるとか、あるいはその公民館が所管する生涯

学習とか社会教育というのはどういうふうなイメージをお持ちになってるか、ちょっと私も疑問に思うんですけども、皆さん、ひょっとしたら公民館というのは研修会や講習会やそういう教養を高めるためのスクールのような、いわゆるカルチャーセンターのようなそういうことをするのが公民館だと思っている方おいでになるんじゃないかと思います。ちょっと危惧しております。実はそういうことではございません。やはり公民館の本来持っている意味というのは、地域の課題をその住民自身が掘り下げていって、その課題の中から解決方法を見つけ、そしてそれに向かって主体的に学習し、実行するという、そういうことを基本の理念としておるんです。

ただ、そうしたことがこの生涯学習という大きな流れの中で、ややそういう本来の姿というものが少し見失われてたという状況があるんじゃないかと思ってます。ただ、そうした最近の厳しい社会情勢の中で再び社会教育というものをそれぞれの個人が学習して自己実現を図るだけではなく、それよりも社会の要請にこたえる、社会のためになる、そういう人を輩出して、そしてそうした人たちが地域の社会のための行動を起こすということに立ち戻っていかなくてはならないのではないかと、そういうふうに関、大きく転換をする中で多分首長さん方も我が手にその経験をつかみ取りたいということもございまして、今も言ったような5つの市は大きな変化を遂げる中でそういう体制づくりをしてるのではないかと考えてます。

さっき申しましたように、変化を遂げてない残りの公民館もさまざまな形で、そして地域課題に立ち向かっております。

それが一つ御紹介したいのは、今お手元にお配りした中に地域力醸成プログラムという青いパンフレットがあるかと思えます。これは県、私どもの教育委員会が平成19年度から行ってる事業でございまして、公民館には地域力を醸成するソフトウェアがあるというふうなことで今、島根の公民館はおもしろいというふうなキャッチフレーズをつけております。

地域力というのは先ほど申しましたように、住民みずからが地域の課題を掘り下げて、その解決に向けた実践活動に結びつけていく力で、これは地域の底力で、そうしたものは基本的に公民館の中に本来持つべきものでございました。そして公民館はこれまでの歴史の中で、やはりそうしたことにもう一度立ち戻っていかなくてはならないと思えますし、公民館にはそれを育ててきた、そういう経過もあります。したがって、公民館がきっちりと機能するところでは、例えばそうしたNPOであるとか、いろいろな組織や団体など新

しい課題に向かって行動を起こしていこうとする目的を持った人が集まってくると思う。そして、そうしたことと連携しながら地域全体が活動をしていけるという、そういう素地があるのではないかと考えております。

したがって、決してこうした公民館とそうしたセンターというものが全く別のものでもございませんし、社会教育と地域振興というものは、まさに車の両輪、表裏一体であるかと思っています。ただ一つ、私どもの社会教育の中で強調しておりますのは、学ぶということをごさいます、地域振興がより地域づくりということに観点が重点を置かれてるかと思いますが、その地域づくりに至るまでのところでやはり社会教育は学びを通してそれぞれの個人個人の内面を充実させることによってそれを達成しようという、そうしたちよつと方法論的に少し違う面はあるかと思いますが、そういうことをごさいます。

もう一つ御紹介いたしますと、そういう大きな転換点の中に立って、私ども平成5年以来、生涯学習課という課名で島根県教育委員会生涯学習課ということで行政を担ってまいりましたが、4月1日からは社会の行政にこたえる人材をつくっていくための社会教育ということで、社会教育課という課名に変更することで、住民の皆様方にそうした動きをまた御承知いただきたいなと思っています。

今後も公民館の方々と私ども県とも協力する中でそうしたことについて、公民館の現場の方々により深く理解いただきたいと思っておりますし、先ほど申し上げましたようにさまざまなノウハウがあります。先ほどいろいろなお話の中でコミュニケーション能力を高めるための研修というのも実は社会教育の現場の中では非常に盛んに行われてます。したがって、今後、私どもの生涯学習推進センターが4月から社会教育研修センターになるわけですが、そういったところにお出かけいただければ、そうしたコーディネーターの研修であるとか、対人能力を磨くための研修というものも今後、地域課題に立ち向かうために必要なそういうノウハウを身につけていただくことも可能であるかと思っています。今後も一緒にやっていきたいというのが私の気持ちです。

○司会 ありがとうございます。

安心いたしました。地域の要請にこたえるということで、ぜひ盛んに今後もまた公民館活動としてもやっていければと思います。

そういえば塚本さん、波佐・小国も公民館組織と一緒にということで活動されてましたよね、その中でまた産直も今回やっていくということになっておりますけども、先ほど冒頭のきょうの最初の紹介の中では産直については余りなかったんですが、その辺のところを

ちょっと御紹介、若干されればなと思います。

○塚本氏 産直市場を手がけておりますけれども、なぜさつき私、JA職員でって暴露したかなと思って、今ちょっと反省しておるんでありますけれども、島根県からのJAを代表しておわびを申し上げたいと思います。（笑声）

私たちのところは地域活性、元気の源をつくるのはやっぱり今はやりの産直市場も忘れてはならないなというのをちょっと展開しております。現在はわずかなテントで展開しております。土日、祝日の開店というようなことで年間300万か400万ぐらいの売り上げしかないんですけれども、それでも結構お客さんがついていただいております、リピーターのお客様も随分いらっしゃるといような状況でございます。

実は、なぜ産直市場というのへ力を入れてるかとお申しますと、このプロジェクト事業でも随分御支援いただいて、振興事業で実際にやっているんですけれども、まず高齢化社会の中でも十分に産地の特産品をつくって売る事業、こういうものに参加できる、だれもが参加できるという一つの大きな利点がございますし、それから今ある施設を使うわけですから、ほとんど投資が必要でないということ、こういったようなことで展開の運びになったんですけれども、産直市場だったら無理に野菜とかなんとかに限るわけじゃないですから、いろんな昔からの地方、田舎ならではの産品をつくって売れば随分注目してもらえます。極端な言い方をすれば私たちが何らお金にはなる予想だにつかなかった稲わら一切れでも売れるというような時代なんですね。そういうようなところがありますし、やっぱり高齢者の方たちも野菜づくりとかいろんな特産品といえ、これは若い人よりもうんとうんとベテランでございますから、幾らでもつくっていただけるということですね。

それともう一つ着目しているのは、先ほどから大矢課長さんも今おっしゃったように、地域のコミュニティーづくりが大切ですよということをおっしゃる、この中でも産直市場というのは単なる売り場ではなくって、非常に都市と、それからお客さんと地元とのコミュニティーの場ができるということ、ましてや最近非常に都市交流事業というのが随分力を入れられてきております。お隣の石橋さんにも随分、御指導いただいておりますけれども、農家民泊というのもちょっと手がけております。これも先ほどと同じように、今ある自分の家を活用できるということ、そして他産業にはもう使っていただけないような年代にあっても幾らでもその事業に参加できるということ。要するに定年制がない産業なんですね。置かれている売り物になるのは自然が非常にバックに、これが皆、武器になってしまうという。

先般もインターネットにこの農家民泊出していただいたもんですから、予想だにしない遠くの関西の方から電話が入ってきました。実は私の家もまねごとで民泊してるんですけども、電話が入ってきました、ネットで見ましたということで、おたくさんはどんなところですかいうて、隣近所は近いんですかいうて、いやいや、全然灯が見えない寂しいところですよと言ったら、ああ、そうですか、その方がいいんですとおっしゃる。

それから、道路はどんな道路が入ってますかいうたら、いや、気をつけてもらいませんと狭い道路なんですというたら、いやいや、その方がまたおもしろいんですとおっしゃる。いや、実際に遠くの方ですから、うちの家内も来ていただいてもちょっと怖いんで、できるだけやめて考え直してもらった方がいいと思って電話したのが全部向こうさんの方がその方が気に入っちゃったらしくて、とうとう先週おいでになりました。すごく喜んでいただきました。

そのように、私たち何げない自然の営みが非常にその新鮮さで生きてくるという、こういったことが今見直されている。

その前に、産直にいたしましても都市交流にいたしましても、趣味とか生きがいで満足に終わってたんでは私はだめだと思うんですね。これをしたたかにビジネスにまで発展させませんと地域の活力はないと思っております。そうした地域の活力というものを少しばかり私たちの組織、縁の里づくりが一つのきっかけづくりをする役目かなというふうに私たちは思っております。

産直にいたしましても、田舎、山奥ですから待っているだけでは非常にお客さんも少ないわけですね。ですから昨年も行いましたけれども、イベントをしょっちゅう起こすわけですね。大騒ぎをするとかにぎやかにやるとかいうようなイベントをすることによって、たくさんの人たちがおいでになる。そしてコミュニティーの場ができ上がる。私たちマネージャーの仕事といたしましても企画、アイデア、こういうものを考えるわけですけども、いろんなところでいつも一杯飲みますといいアイデアが出るんですけども、それはアイデアの思いつきで終わってしまうんですね。よその方たちがそういったことを実行されると、ああ、そんなことはもう何年も前におれたち気がついてたよと、やらなかっただけで全然、気がついてたのは意味が

[テープ中断]

○塚本氏 わけですね。そんなに大きなことでなくても思いつきでもいいですから、いいことがあればチャレンジを実行せにやあだめだと思うんですね。

私もJA40年やらせてもらいましたけれども、いろいろとその中では失敗を重ねておりました、いろんなことをやって失敗して組合長に怒られておりますけれども、この年になりますと失敗が恐ろしくなくなっちゃいまして、だめでもともと、失敗したら2回目はやらなきゃいいじゃないかと。まずやってみようやということで、いろんな企画をさせてもらって、何名かが、おお、それはおもしろいかもなというふうに賛同していただくと、縁の里づくりの委員会でもスタッフの方々が非常にそれはおもしろいねというふうに賛同してもらおうと、そうなれば今度はこっちのもんでございますから、どんどんどんどん進めていくという、要するに実行力といいますか、これが非常に私は大切じゃないかなという、それが一つの組織であり、マネージャーの仕事でもあるというふうにちょっと最近思っておるところであります。

○司会 ありがとうございます。

収益づくり、趣味で終わらないというの非常に大事なことかなと思います。

種地区でも渡邊さんここでまなびや工房で加工をやっておりますが、手短でいいんですが、差し支えなければちょっと経営状況を教えていただけないものでしょうか。

○渡邊氏 ちはすぐそういうふうに皆さん、うちの経営状況はいうて言われるわけですよ。私たちは経営状況どうのこうのでまなびや工房つくってません。じゃあ、何でつくったのいうことになるわけですけど、考えてほしいと思うんですよね、今まであった中学校はなくなってます。また小学校がなくなったわけですね。地域に核になるものがなくなってしまったわけですね。農協も今、週2回、集金と配金、お金配って回るぐらいしか来てくれてません。こうしてまた石見交通が路線バス、種線を廃止しますいうて言ってるわけですね。何ととってもいいことがないんですね。こういう状況の中で、じゃあ、地区の人が学校がなくなった。何を希望を与えてあげたらいいかいうことなんですよ。特にお年寄りの方は今まで地域コーディネーターとして学校へ行って昔のことをお話ししたり、また昔の遊びを子供と一緒にやったり、一緒に稲つくったり豆つくったり収穫祭やってたわけですね。このお年寄りが統合されたために10キロも先の安田小学校へ行ってこんなことをやるわけではないですよ。

そうすると、このお年寄りを地域の中で、はあ、学校がなくなって寂しいな寂しいな言わないで、あ、じゃあわしらこれができるないう仕組みづくりが欲しかったと。ですから加工場をつくったわけですね。加工場をつくることにおいてすべてが回り出したわけですね。要するに米をつくってる農家は米、その田んぼ、つくり続けているわけですから、じ

やあ、つくってない減反された荒廃地がいっぱいあるわけですね、ここを復元して小豆をつくって加工場へ持っていく。これをもちのあんこにして出荷する。豆茶をつくってもらおう。これは津和野の河田製茶へ持っていく。大根つくってもらおう。これも加工場へ持って行って乾燥しましょう。

種、竹が結構多いんですね。竹林被害が前から見えてました。竹炭にしようって、文化祭でもドラム缶で炭焼きますよというようなことをやって、煙が出るような炭つくって笑われて竹を減らす方策がなかったんですね。加工場をつくったおかげで、タケノコを農家さんからとってもらったら買い上げができるわけですね。買い上げることによってタケノコは掘ってもらえると。これ加工場へ持ってきて水煮にしたり乾燥タケノコにして商品化にしてるわけですね。

ですから、うちは今からは採算を求めるような、加工場が独立するような施策は打ちます。でも今はそうじゃないんですよ。地域がみんな一体になって一つのものをつくり上げて、生産から出荷まで全員でかかわれるような体系をつくって活力を与えようとしてるわけですよ。

学校がなくなった、地域からいろいろなものがなくなって寂しいなちゅう、この寂しさを消してあげたいいうんが私たちの考え方で事業を展開してます。ですから、加工場の収益のことを言われると時間当たりほとんどボランティアです。去年は時間100何円の世界です。ことしは岩藤さんがあそこへおってですから200円の世界じゃないですかね。これを少なくとも500円の世界へ持っていきたいところですよ。それは考えてます。豆茶が成功してずっと栽培を続行してる部分は時間500円ぐらいになってるんですよ。ですから、年金生活して時間500円にでもなったら働きに来てくれると。ここに1個コミュニティーの場ができるわけですよ。

もう1点は、昔のよき時代の中山間、田舎に戻りたいんですよ。今は隣近所でも田舎だってそんなにかかわりがないじゃないですか。豆茶を共同栽培することによって、休み時間はみんなで一緒にお茶飲む、収穫が終わったら飯炊いて食べようとか、こういうコミュニティーの場所ができてるわけですね。収穫したものを加工場へ持って行って、ここで加工場へ20人の人が働くならここにもコミュニティーの場ができてると。

ですから、私は最終目標を各自治会にこういう生産のコミュニティーの場と加工場を中心としたコミュニティーの場、加工場をもっと飛躍させるために今の旧管理棟を改装して、ここで種で生まれて種で学んだ人は種で最後までお葬式出してあげるような施設をつくっ

てあげたいと。このことを言うと、年金受給者の方が益田で200万もかけて葬儀やるとか、種でこういう施設使ってやったら、僕は五、六十万で上がると見てますから、こういうこともあわせて地域にできるだけお金を使わせない、お金を入れてあげる、みんなです仕事できる、こういうことはやりたいと考えてます。ですから、今は採算は度外視です。
○司会 ありがとうございます。

そうすると、農業経営課の山本さん、ちょっとコメントいただきたいんですけども、こういう形で従来は営農といいますか、農業対策から今、農村対策というか、そういう方向で今の渡邊さんのお話も地域の中のコミュニティーの場の創出だとか、そういった方向での取り組みもありますけれども、そういうようなところで県の方向性だとか施策について御紹介いただければと思います。

○山本氏 壇上の皆さん方の取り組み、それから午前中からの御発表の中に産業の振興ということでキーワードとして加工ですとか直売の産直、特産品づくりといったことが取り組まれているということです。

中山間地域の場合は農業、あるいは林業が中止になるというふうには思いますが、いかにせん高齢化、それから人口の流出という現象の中でなかなか難しい面がございますけども、島根県では集落営農組織ということで、集落営農組織という言葉が午前中の発表のときに二、三回出てきたかと思っておりますけども、こういった組織的な営農体制づくりに取り組んでいます。これは農業機械の共同化による低コストとか、それから作業計画、土地計画を皆さんが話し合っていて合理的に進めていくということで、あくまで営農方式の一つなんですね。これは集落、1集落あるいは数集落でもつくっていくということなんですが、これに加えて平成20年度から地域貢献型集落営農ということで、島根県独自に名前をつけまして、農業生産のみならず農地の維持とか環境形成ですとか、生活の場づくりですとか、それから事例でもたくさん出てまいりました多角化によります雇用の場の確保ですとかいったいろいろな要素に取り組む集落営農組織というもので現在、育成確保を推進しているところです。

ここで効果としましては経済効果はもちろん新しい野菜をつくること、加工を始めるとかといったことに加えて、女性ですとか高齢者の活動の場をふやしていくという効果をねらうということです。

したがって、先ほどからお話がありますように、そういった取り組みを通しまして、単なる農業生産のみならずコミュニティーの場づくりということも十分期待ができるのでは

ないかというふうに思います。

それから、いろんな農業生産活動やっついていられる中でこういった集落営農組織の契約栽培をすとか、減量生産お願いすとか、それから種では買い取りですね、こういった農業生産のお互いの連携ということも考えられると思いますので、今後ともまた集落営農組織とコミュニティーづくりということを私たちも取り組んでまいりますし、皆さんのところでも連携を深めていただきたいというふうに思います。

○司会 ありがとうございます。

時間が大分迫ってきておりますが、若干きょうの議論をまとめさせていただくと、まずその地域マネージャーとしての人材の配置ですね、これについてはつながりをつくっていくということが地域マネージャーのお仕事だという視点もいただきました。特にそのときに2人体制、あるいは3人セットという、そういう新しい方々もやりたいということを出していくということが一つの役割なのかなと思います。そのときにベースになるのはやはり地域自主組織だとか、何とか協議会とかプロジェクトというような、そういう地域の母体となる組織も重要なかなと思います。ただ、そのときに公民館との連携はきょうかなりお話もいただきましたが、何もそこへ縦割りするわけじゃなくて、地域課題を住民さんが掘り下げることが一つの生涯学習の役割であるということで、そういう部分ではぜひぜひ、またその垣根を取っ払ってやっっていくということが求められてくるのかなと思います。

そしてまた、産業面でも農業の方では地域貢献型集落営農と、また収入の部分でいいますと産直とか民泊というものが地域の資源をお金にかえる措置として、今後は機能していくのかなというふうなところが見えてきたところでございます。

済みません、なかなか進行がうまくいなくて、本当はもっともっと皆さんにお話を聞きたいところですけども、まとめとしまして最後コメントいただいて、この会を閉じたいと思います。

最後は地域振興室長の伊藤さんの方からコメントいただければと思います。

○伊藤氏 皆さん、ありがとうございました。それから急に登壇していただくことになり、大変でしたがありがとうございました。

私もきょうのお話聞いておまして、モデル事業をやっついていただいております市町村の皆様ともいろいろこれまでお話をしてきたところなんですけども、まさに今の笠松さんの方でもまとめていただいたように、地域マネージャーの方を中心とする人材、それから公民館、あるいは農村対策という面での行政の中でのほかの部門との連携といいましようか、

そういったことが非常に大切ではないかということのを再認識させていただいた次第です。

まず、人材、地域マネージャーについてでありますけども、私どものモデル事業で提案させていただきまして、各地域に1名、中には常勤、ほぼ毎日地域マネージャーの業務に携わっている方もいらっしゃいますし、また非常勤の方もいらっしゃいます。今後どう展開していくかというのはまた地域によってさまざまなのでしょうけども、しっかりとした仕事があるんだなということがモデル地区、あるいは我々の実感としてあるということでもあります。

そういった中で、一方できょう言われてましたけども、公民館というのは非常に注目を浴びつつあるというか、重要視されつつあるところです。各市町村なり地域によって地域自主組織、それから公民館との関係というのはさまざまなものがあるんじゃないかなと思いますが、恐らくこれから地域をつくっていく、あるいは地域を活性化していくときには、地域の住民の方々だけの取り組みでも限界がございますでしょうし、行政だけの取り組みでも限界があるんじゃないかなというふう感じたところでもあります。

地域マネージャーの方を中心に、あるいはその地域自主組織の役員の方を中心に、それから公民館の方を介して市町村、あるいは県の行政のいろんなツールを御活用いただきながら、地域をどうつくっていくか、その道筋というのを考えていただくことが重要なことというふうにも感じたところです。

そういった中で我々、行政、市町村の方もきょうたくさんお見えですし、県の方からもたくさんお見えかと思っておりますけども、行政というのはとかく縦割りで物事を考えがちであります。きょうお話しいただいたように、一方で地域の方々というのは、日々いろんな課題なりいろんな元気の源にも直面しながら取り組んでおられますので、我々、行政サイドも同じ感覚で横断的に物を見て提案できる、あるいは施策を決断できる、そういったことを心がけていかないといけないということも感じた次第です。

急な登壇にもかかわらず有意義なお話をお伺いすることができました。我々もきょうのお話を肝に銘じて取り組んでまいりたいと思います。

○司会 それでは、地域づくり、教育、農業、福祉、もろもろありますが、その辺のところの横断、連携、相互というところで最初に申し上げたテーマが何となく見えてきたかなと思いますし、行政サイドからも非常に力強い後押しがあったところだと思います。

これにて今回のトークセッションを閉じたいと思いますが、ちょうどプロジェクターもう直っているところですので、じゃあ、後半に引き継ぎたいと思います。

どうも、皆様ありがとうございました。（拍手）